

光明 第五巻第二号

反響

涙の内に溢るる微笑

静かに町の夜は更けて行く。

零時、一時と、何時の間にか懐しい座談に我を忘れて夜を更かす。

「すみませんでした。ほんとうにすみませんでした。長い育てのみ手をわずらわせて、『喜ぶの、信心の』と、いらぬ自力、すみませんでした……」
泣き伏す法師。泣かさるる満座。
やがて皆の顔に溢るる涙の内の微笑。

肉親の親と大悲のみ親の、慈悲と恩とを語らんとして、「善人なほもて往生をとぐ、如何にいはんや悪人をや」と言つたきり、慟哭してしまつた梟中五年の法兄。

五分、六分、沈黙が続く。

「おお地上もまだ確かなものよ……」
思わず叫ぶ私の一語に、皆われに返つて、無言のままに涙の内に微笑が溢れる。
人通りのなくなつた三時過ぎの町の中を、念仏の子が燃ゆる念願を語りつつ歩む。
「有難い」の一語が皆を支配する。

生ぬるい

溺れ流るる者にとつては助け船の長さを計る余裕はない。

不治の難病だと宣告された者に、「これはどんな瀕死の重体でも一服で助かるから飲め」と与えられた丸薬を、何と何とで処方されてあるかを研究している暇はない。

「未来はあるか。」

「地獄はあるか。」

「阿弥陀仏は存在するか。」

その説明や証明は一通り出来るであろう。けれども、それは、人生に対して深い考へのない、自分自身に対して徹底した批判のないひま人、浮かれ調子の人の仕事である。砂糖の甘きをなめずして、「砂糖は甘きものなり。」と千度教えられても、それはただ一個の概念を頭につめこんだに過ぎぬ。

未来はある、と証明されたらどうするのだ。

地獄はある、と証明されたらどうするのだ。

もちろん、真実宗教は、科学によつていよいよその真面目を發揮する。世には学問が進めば宗教は無くなるように思う人がある。大まちがいの浅智慧である。

「阿弥陀仏は存在するか。」

私にはわからぬ。世間の事柄さえほんとうは知り得ぬ私、明日をも知らぬ智慧、障子一重先の見えぬ目、世間普通のことすらよくわからぬ私に、一如法界に遍満したまう絶対者をどうして知ることが出来よう。でも阿弥陀仏のありたまうことはあまりに必然である。ただ私はいらざる説明をぬきにする。

ただそれに答える代りに、

「それがあなたの悲痛な要求ではありませんか。」とお問いする。

自己の内面を知らざる人のひまだらけの概念の化城。

化城から出よ。遊戯からさめよ。そうして魂の実感の上に立て。

「未来はあるか」

それは説明されて後あるのではない。あなたのなくてはならぬ願いなのだ。永遠の未来なくしては今日一日の生活すら私には無意義になる。誰の生活にも未来が予想されてある。自己を知らざる者のあまりに低級なる議論。人はほんとうの自己にかえらねばならぬ。自分を知らねばならぬ。

自分を知るとは、「自我とは何か」とか、「生命とは何か」とか、そんなひからびた概念や言葉を並べるのではない。現に今、涙にぬれる私、生活苦にやつれている私、その私を知ることなのだ。そうして悲惨にも血みどろになつて時間の上を流れている魂の声をきくのだ。

自己をぬきにして議論に日を暮らす哀れなる漂浪者^{ひょうろう}。

これという何も持たないで満足している哀れなる貧窮。

よそおわれた自分の奥に徹せよ。

そこに涙を通しての世界がある。

「我なんじを護る！」のみ声によみがえる。

救わるる資格

あなたは、

(一) 腹は立ちませぬか (瞋恚)、

(二) 愚痴は言いませぬか (愚痴)

(三) 欲心はありませぬか (貪欲)

それがあなたの心の作用の全部ではないか。

(四) 虚言は言いませぬか (妄語)

(五) 言葉を飾つてはいませぬか (綺語)

(六) 二重舌 (二枚舌) を使つてはいませぬか (両舌)

(七) 他人の悪口は言いませぬか (悪口)

私の口業の全部であります。平素何も気づきませぬけれど、はっと気がつけば人を慰める言葉すら、飾りよそおわれたことでした。

私のしていることは、

(八) 殺生。仏の子を食わねば生き得ぬ私です。

(九) 偷盗。幾度か人のものを盗んでいます。

(二〇) 邪淫。人間である以上、色情のないものが何人いよう。姦淫によつて生れた子ではないか。

この三つは私の身業の全部です。如何に力んでもこの「十悪の凡夫」たることから誰が除かれようぞ。

「悪業の凡夫、過去の業因にひかされてこれらの重罪をおかす。これとどめがたく伏しがたし。また小罪なりともおかすべからずといへば、凡夫ごころにまかせて、つみをばとどめ待つべしときこゆ。しかれどももとより罪体の凡夫、大小を論ぜず。三業(口と身と心)みなつみにあらずということなし。」(口伝抄)

生きることは罪である。身、口、意の三業ごとごとくみな罪である。「汝等、臭き屍を抱きて臥する勿れ。種々の不浄を仮に人と名く。重病を得れば箭の体に入るが如し。衆の苦痛集るに、安ぞ眠るべけんや。」(中夜偏)

種々の不浄を仮に「人」と名づく。十悪のけがれを仮に「人」と名づく。けれど、自力円頓の聖道門は私に教える。

「煩惱と菩提に二つはないぞ。煩惱のままが菩提である。生死のままが涅槃(さとりの境界)である。」

と教えてくれても、

「経に云はく。煩惱菩提体二なく。生死涅槃も異処にあらずと云々。我いま未だ智火の分あらず。故に煩惱の氷を解きて、功德の水と成すこと能はず。」(往生要集)

まことに実相の真面目より言えば、生もなく、死もなく、善もなく、悪もなく、一切諸仏唯一如来にして、救うべき衆生なく、化すべき我もないであろう。三千大千世界の全ても、一微塵に至るまで如来たらざるはなく、草木国土一切成仏。我も人も如来以外の何物でもないであろう。これ第一義諦、真如実相の真面目である。

けれども我は現に涙を持つ。人間苦に悲泣する。とこしえに出づることなき無明煩惱の迷いを続ける。十悪五逆はこれ我体、我心の全部であった。

「弥陀の本願には、老少善悪のひとをえらばれず。ただ信心を要とすと知るべし。そのゆゑは、罪悪深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします。」(歎異抄)

ああ、み救いは、悪人だと気づかせられた我故であった。

み仏のやるせないみ心のありつたけは、若い者でも、老人でも、善人でも、悪人でも、何でもよかつたのだ。

「我、無量劫に於いて大施主となり、普く諸の貧苦を濟わずんば、誓つて正覚を成ぜず。」(大無量寿経)

十悪の極重悪人こそ、み救いの生起根本であつた。

我、不幸にして末世濁乱の世に、十悪の罪の子として生る。

けれど、我、幸にも値いがたきみ救いにあいて、このままを救いたまう信の一念によみがえる。

罪の子。それが救わる資格である。

哀れなるかな、善人聖者よ!

否、哀れなる故、十悪の凡夫たることを知らざる土偶人形よ。

鉛白と紅とをもつて十悪の上に塗りつけて、人の面したる土偶人形が、念仏の行者を誘つて、大道を地獄に向かつて急ぐ。

空虚の自己に金紗や縮緬の綾羅りょうらをうちかけ、金銀の装いを施して（心をとれ、衣服ではない）意気揚々として街路にほこる。痛ましいかな。動ける衣桁いこう。

目覚めざる土偶人形にも、動ける衣桁にも、未だ魂の黎明は近づかない。けれども彼らの内にも弥陀の光明は流れたまう。信の一念によみがえれ。

弘誓の船の広き哉

計量に設計に五劫を費やし、兆載不可思議永劫かかりて竣工したる、弘誓の船の阿弥陀丸。

一切衆生を乗せて難度海を走る。

輝ける無量燭光のサーチライト、難度海を照す。

「無明長夜の燈炬なり 智眼くらしとかなしむな

生死大海の船筏なり 罪障重しとなげかざれ」

トン数知れぬ大船には、風船玉（善人聖者）を乗せたとして、重いく／＼鉄塊（十悪五逆の我）を乗せたとして何のかかわることはない。

弘誓の大船阿弥陀丸、一切の老少善悪を積みこんで走る。

「竊におもんみれば、難思の弘誓は難度の海を度する大船、無碍の光明は無明の闇を破する慧日なり。」（本典総序）

ああ、人生の難度海、生死の海の苦しさ辛さ、辛き苦しき難度海を、苦しみを乗せたまま、弘誓の大船、西に向つて走る。

「本願円頓一乗は 逆悪摂すと信知して

煩惱菩提体無二と すみやかにとくさとらしむ」

本願とは弥陀の救わねばおかぬ本願である。

円頓とは、円とは完全である。欠けたところのないことである。頓とは早いことである。瞬きするよりも早いことである。信の一念に、「トン」と、一切が完全にかわるのである。

暗黒は光明に、地獄は極楽に、貧窮は無量の功德に、不安心は安心に。

しかもそれが早いのである。一ぺんにである。完全に一ぺんに。

一乗は一つの乗物である。誰もかれも皆仏になることの出来るたつた一つの乗り物である。弥陀の乗物は大乗である。大きな乗り物である。大きなたつた一つの乗り物である。弥陀によつて与えられたる乗り物である。

聖者も乗れ、善人も乗れ、逆悪の私も乗せてもらう。信の一念に、乗せられていたことを知った時、世界は全て変つて来る。

弘誓の船の中には、煩惱の外に菩提はない。煩惱のままがさとりのである。弥陀の手にのみ「煩惱即菩提」の釈尊説法の第一義諦が完全にあらわれる。

弥陀の弘誓の内に於いてのみ、罪もなく迷いもなく、さとりもなく、生死なく、本来空の真面目が知られて来る。

ああ弘誓の船の広さかな。

「ああ蒼穹の雲は晴れ

真如のみ光いや高し。

見よ願海に波もなく

弘誓の船のいや広し。」（団歌三節）

動きなき信

「念仏が口に出なくても、喜びがなくなっても、狂っても、全ての人に捨てられても、乱れても、言う事がまちがっていても、私は救われてゆく。嫌でも仕方がない。私が淋しいと泣くままを、嫌々と言いながらも、み救いに引きずられてゆく。」（恵まれた手紙の一節）

信心の行者、そこまで徹せよ。

もし私が業の出で来るままに、冷たい監獄にひかれたら、全ての同胞も世人も棄てるだろう。けれどもその時だつて私は念仏の子、仏のみ救いに動きはない。

「暴虐なる君は、我が手足を鎖ぐを得べし。されど我心を鎖ぐべからず。我が首を切り得べし。我が心を斬るべからず。病氣は身体の障害にして心の障害にあらず。病氣を喜ぶと悲しむとは自己の自由にして、病氣を恐れざる人のためには、病氣は更に障害とならず。」（エピクテタス）

身は如何なる苦難にあつたとて、如何なる不幸にあつたとて、私には念仏の子の試練である。如何なる時もみ親は我が力にてありたまう。

「私は病身なればこそ弥陀のお救いを知らせて戴きました」とよろこぶところ、病氣さえ感謝の生活の門途であつたのだ。

何でもいい。ただ念仏で生きてゆく。

「……『人間性に立脚して』のお言葉は、私の胸にひしひしとこたえました。聖者ぶる人も嫌らしく思われます。人間の欲望をそのまま現わして何とも思わない人も浅はかに感ぜられます。ただ聖者たることを祈念しつつも、根強く働く業報の如何ともし難きに、自分の醜さを眺めて泣いて、み仏の前にひざまずく人のみ、限りなくなつかしく感ぜられます。

……中略……読経生活と言えば美しく聞えましても、職業的の三字が加わりませんがために（こう申しますことは非常に苦しく感じますけれど）、それは人間の醜い欲望生活でありました。檀家からいただきまます布施を一度でも如来からの冥加として受けたでしょうか。香煙縷々として上る仏壇の前で、一度でも有難い気分になち／＼と読経したことがあるでしょうか。私は心に問うて見ました。しかしただ懺悔の涙が頬を伝わるのみでございました。私は布施の多からんことをのみ思い、眠り気持ちで

読経したことが幾度かありました。しばしば僧侶をお戒めなさった蓮師のお言葉は拝読いたしますけれど、布施を受け取ります時の私の心地は、否定しようと思いません。否定出来ないのです。この心持ちを離れようといたしますれば、今の生活を転換するより外仕方はありません。しかし私は布施太子のように雄々しく母に戦いを宣言することは出来ません。私が魂の目覚めの手紙を先生に差し上げましてからもう一年になります。よく考えて見ますれば、その日から私は一歩も進んではないのでございます。

……中略……先生からのある日の書信には『真実の僧侶になつて下さい』とありました。この言葉は私に強くひびきました。そうして真実の僧侶になろうと努めました。けれども努めれば努めるだけ、私自身の僧生活が醜く見えました。そして今の生活から脱したい望みがいよいよ濃厚になつて参ります。ああ私はこんなにしていつまでも悩み続けることでしょうか。先生永久に導き下さい。」

法兄法姉様。皆様。こんな謙虚な念仏の子も私たちの法兄様でございます。おお何という懐しさであろう。何という嬉しさでしょう。歎すまりな歎きつつ仏前にひれ伏したまう法兄のみ姿（未だお目にあたりぬ法兄）が尊く思われます。大学の途中、病気に静かに養いたまうお体、皆様一緒に御全快を願いましたましよう。

ともすればあさましい裸形外道のそのまま、大地の上をノソノソとはいながら、平気でいる私です。恥知らずの私がこの上なく悲しまれます。

清らかな生活を求めます。それは目覚めた者の絶えない願いでもある。けれどもこの十悪の醜い罪が私の内容である以上は、何をして、どこに行つても汚き醜さはついて来ます。お光に照されて私自身のほんとの様子を見せつけられれば、見せつけられるだけ、罪に泣く、否、罪に泣きもしないほど、嫌な私であった。

「世をいとひ、山に入る人 山にても、なほうき時は何地ゆくらん」

どうせこのままを救われねばならぬ私です。罪に悲泣する私の法兄、法姉、おなつかしうございます。

自分の醜さを見て泣く。それは念仏の子の正しい生き方である。

けれども自分の醜さを以つて、如来の信心を疑つてはならぬ。生きる間、とこしへに汚れたる罪の子である。如来の信心はかかる我等の内に直入したまう。冷たき食欲の故にも、熱き怒りの炎にも、びくともしない金剛の信心である。私のきたなさを見れば見るだけ、かかる我を救いたまうと、いよいよ動きなき信に入らねばならぬ。

お光のみ亡びざるもの

太陽はまばゆい光を燦然と放つて東の山をはなれて十劫、

「光澤かぶらぬ者ぞなき、真実明に帰命せよ。」

夜は明けぬ。

美しい花園の牡丹も、醜い名も知れぬ道ばたの花も、みんなみ光に照されている。み光そのものに育てられている。

夜は明けぬ。

祝福された地上。

嫌なこと、悲しいこと、辛いことの充ち充ちた地上そのままが、強い光に照されている。

何があつてもそのままに、み光の中に於いての事でしかない。

み光は全てのものの皆の、それぞれの運命に従つて、それぞれを完全に育てあげる。

祝福された地上。

夜は明けぬ。

けれども、大方の人は皆、未だ、光に目をそそがない。

光に背をむけて、大地にうつる自分の影、幻影を追うて走っている。

自分が走れば影も走る。影を捕らえようとすればするだけ逃げる。

逃げるから追う。かくて、永劫の迷いを続ける。

痛ましい哉、目覚めざる輪廻の旅人。

造られたるものは亡ぶ。因縁によるが故に。

名を不朽に伝えんがための銅像も記念塔も雲をつく西洋館も、不朽の大都と誇つたローマの市街の亡んだ如くに、みな亡んでなくなつてしまふ。

この地球さえも何時かなくなる。

然り、もの皆は亡ぶ。その亡ぶ者の一つとして生きてゆく私。

そうしてその亡ぶものを一大事と握りたい、亡ぶ者の内に絶対の価値を見出そうとする、そこに気の毒な努力があり、そうして充されない人生の淋しさがある。

亡びゆくもの全てが一応私の力である。

これを借らねば生きて行かれぬ。けれども未通りたる力ではない。

亡びゆくものみに執着してしまふところに、人間の迷いがある。

それのみを追うところに幻影の生活がある。

念仏によつてすべてが集束される。

み光を通してすべてを見る。

み光のみ亡びざるものである。

そこに念仏の未通りたる生活が生れる。

太陽は登る。

祝福された地上。

かのみ光をあおぐ時、すべてに執着したままに、全てを離れた、無我の生活が恵まれる。

「精一^{せいいつ}の清々^{せいせい}を求めよ」

親鸞聖人は「救われた者は安き眠りに入れよ」とは教えられない。

み光によつて無上の歡喜を与えられ、大慰安を与えられ、大威力を与えられることを説かれた。み仏の心を心とせる常行大悲の活動力を与えられているのだ。細々で

もみ仏の大慈大悲を私の心とさせて頂き、如何なる辛酸とも戦いつつ、報謝の大業に生きさせてもらわねばならない。

寂しき寺院の様子を見る。淡暗きところただ老いたる男女の極楽参りの受け取りに念仏の声聞ゆ、若き者、比較的知識階級の者の何パーセントが仏の前に頭をたれる。これ果して何の原因だろう。私はその全てを言うを好まぬ。

幸にして私たちの光明団は、新しき時代の教養ある人を以つて満されている。田舎に入れられずして都会に求められる。

私は切に切に諸姉の自重を求む。

信仰は我が機の極悪人たることを徹底的に教える。けれどもその目覚めはただそれにとどまるものではない。

罪の子のあさましき現実に泣く涙は、そのままに大悲に抱かれたる歓喜の涙にかわる。

罪に悲泣することを知り、頼りなき人生を知り、電光朝露の頼みがたなき命を知りて、ただ悲観することのみにおわる者は、これ真実の信仰ではない。

罪を知りて、救いを知らねば、人生は永遠に苦しき牢獄である。

罪の自覚はそれがすぐ、真に生きる大道への恵みである。

罪の死が、親里への往生によみがえる。

そこに未来の全解決がある。

未来全体の大解決があつて初めて現実のほんとうの大安心がある。

かくて信仰は、嫌な死ぬることに囚われた問題ではなかつた。

永劫に生きる大道の悠々闊歩であつた。

理論は抜きにして「精一ぱい清く生きよ。」それが全ての聖者の第一提唱である。出来る出来ないとは問題外である。私たちは如何なる悪人をも棄てない。どんな人も抱き込む。けれどその人々に「精一ぱい清く生きよ。」それは能不能にかかわらず、永久の真理である。

「精一ぱい清く」その念願が失われた時、全ての団体は魂のぬけた殻となる。その昔、キリスト教のローマ法王は、罪障消滅札を売つて、金を出して札を買えば罪の亡ぶることを教えた。そうして新教の奮起があつた。

親鸞聖人出でて七百年。長い因襲に平安の眠りに入れる真宗の教団にも、その昔ローマに於いて行われた事実に似たることはないか。

亡ぶものは亡びよ。全ては改造されて行け。

切れば血の出る若き信仰に生きられる同胞諸姉を誠む。

ただそれ自重せよ。

「精一ぱい清きを求めよ。」

反響

多忙の内に唯、寄せ来る声の反響が、秩序もなくペンの走るままに、本号となって現れる。

信仰に入り得る者は無知識ではあつても、人生のほんとうを見る智慧者である。

消息

一月十三日夜 広島病院にて講演。同じような方のお揃い、緊張した聴き振りに話も自然緊張する。

一月十四日 広島東支部の発会、色々な方のお集り。盛会裡に閉会、以後第一土曜及第一日曜の昼夜広島に來いと命ぜらる。

一月十五日 御逮夜。養專寺に参詣、又講演を頼まれる。十六日昼、浄国寺で二席、夜、正念寺で一席、強いられては立つ。

一月二十七日 郷里に帰り風邪を病む、二十八、九、十、三十一日まで床に就く。仕事如山ほど積る。でも静かに念仏の数日が恵まれた。

二月三日(第一土曜日)夜 広島病院の講堂で講演、咽喉が悪くて苦しい。

二月四日 昼夜共段原にて講演、熱心なお集り、夜を更かす。お蔭で毎夜二、三時間睡眠。

二月五日夜 広島市南竹屋町青年分団から宣伝までしたからと強請されて若い方ばかりの前に立つ。

二月十一日夜 浄国寺(藤浦主伴法兄住職)で本部の例会を開く。集る者堂に満ち、立錫の余地なし。十二礼読誦の声強くひびき、団歌の合唱に意気天を衝く。藤浦法兄立つて熱烈に叫ばれたる後、余立つて熱して殆ど我を忘る。

二月十七日午後二時半 小河内支部に参会の予定。

二月十八日 鈴張村長覚寺の講演、本部諸兄姉おしかけんと今よりお待ちかねの様子。同日鈴張支部生れん。

二十四日夜及二十五日 右半佐々木行次郎氏宅にてお話せよとの御依頼。

三月二日 亀山村行森婦人会主催説教及講演会出席講演。

三月三日 広島市中島浄宝仏教青年会に出席講演の予定。

三月四日夜 広島東支部に参会す。(当日昼は差支出席不能、御承知下さい)

学年末多忙の時、毎日が二つほしいほどの多忙、毎日下さるお手紙に一本の御返事も出せない私をお免し下さい。決して何とも思っていないのではありませぬ。一重に駄目なからです。

本部諸兄姉御多忙の中にも面倒な事務をとつて下さる。送金には振替を御利用下さい。直接現金を取り扱うことが無くて本部が助かります。新入団の方も用紙の裏にその旨御記入御申し込み下さい。

お金のことを申すのは心苦しいのですが、二年三年少しも御出費下さいません方二百人、ただ皆様の御賢察におまかせします。営利団体ではなくて、ただ感激によつて結ばれた、そして感激によつて育つて行く団体でございます。御無礼の程お免し下さいませ。